

令和2(2020)年度 第3学期終業式 および中学卒業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

コロナ禍に翻弄された一年が終わろうとしています。年度が改まるこの時期は、だれにとっても“節目”として意識されるもので、その意味するところは本来は人によって様々であるわけですが、今年に限っては、だれもが例外なく、私のこの一年を語ることは“コロナ”を外しては不可能であると思う、つまり、世界中の人々が“コロナ”という言葉で括られてしまう、そういった異常事態であると感じています。

その中で、私たちは今年も「3・11」を迎えました。なにせ10年前の出来事ですから、中学生諸君にとっては、震災そのものは記憶に残っていないものなのかもしれません。しかし、次代に伝えるべきものとして、非常に多くの言説が取り交わされていますから、皆さんも“自分のこと”として捉えねばならないという観念は持っていることでしょう。そんな言説のうち、私は、先ごろ作家の川上弘美さんが新聞に寄稿したエッセーに接する幸運を得ました。「東日本大震災10年『何が残り、何を遺すか』』というテーマに沿って著された、非常に示唆に富む文章です。ここに紹介しようと思います。

川上さんは、1993年に『神様』という優れた短編によってデビューした作家で、大震災の翌週に『神様2011』を発表して話題となりました。

『神様』は、「くまにさそわれて散歩に出る」という一文で始まります。作中で、主人公「わたし」は、奇異の目にさらされながらも「くま」と連れだって歩き、川原での一日を楽しんで、最後には「くま」の抱擁を受け入れて「くまの神様」のお恵みがあることを祈ってもらいます。この度のエッセーで川上さんはこの作品について、周囲とうまく交われない彼女と息子との姿をこの「散歩」に託し、世界からずれているという感覚を小説の中に解放したと述べています。そして、世界とずれた場所にいることは必ずしも不幸なことではない、とも語っています。

一方、『神様2011』で「わたし」と「くま」は、放射線量を量りながら同じように散歩します。そこには、「パーンチ！」と言って殴りかかり無邪気にしかし容赦なく異物扱いする子どももいなければ、ほとんど空室になったマンションは「くま」を異物ととらえる指標も失っているわけです。そんな中、淡々と散歩している姿を描き出すことで、日常がある日突然取り返しようにもなく変化することを、“当事者”として語ろうとしたと言うのです。“当事者”であろうというその意志は、非常に深い思いを一般化したものだと思います。このことを忘れまい、二度と繰り返すまい、そう亡き人に誓ったのだと思います。

それでも“傍観者”になってしまった、とエッセーで川上さんは語ります。「偶然だけが境遇を形づくってきた」との見解は諦念にも似て、何度も「申し訳ない」と言うその思いが、ずっしり重く感じられます。そんな中で自分にできることは、他のどの場所の問題にも置き換えることができない個々の問題に、こまぎれに直面することしかない、と述べる川上さんの言葉から、私は、むしろほっとするのを感じます。“傍観者”になってしまったことを誠実に悔いる態度が、「世界とずれた場所にいるのは、必ずしも不幸なことではない」という見方に通じると思えるからなのかもしれません。

さらに、川上さんは今般のコロナ禍に触れて、「すべての人が、少しずつ世界からずれた場所にいるかの

ようだ」と述べているのです。確かにそうかもしれません。世界中がコロナという共通の災禍に見舞われながら、個々人が直面したのは、実は他人には分け持ってもらえない自分だけの痛みなのですから。そのように考えると、私たちはこの一年のあいだ、自分は世界からずれた場所にいるという不安を密かに抱きながら、それを直視するまいと徒に頑張ってきたのかもしれないという思いに至りました。本来、「こまぎれに直面するしかない」はずの「個々の問題」を、強い言説によって一般化する“権威”に依存して、それが、その裏で個々の存在に対するどんな圧力となるかに思い当たっていなかったなあと思うのです。

今、世界とずれた場所にいる「すべての人」に、「ずれた場所にいるのは、必ずしも不幸なことではない」と語りかけたいと言う川上弘美さんの次の作品を、楽しみに待ちたいと思っています。そして、つかの間の春休みではありますが、陽光のなか散歩を楽しみながら、隣を歩く「くま」の存在に思いを馳せてみるのも良いかなと考えているところです。

もちろん諸君には散歩を強制するものではありません。思い思いのやり方で、「個々の問題」について考えを巡らせてほしいと希望しています。

さて、中学3年生諸君、ご卒業おめでとうございます。

義務教育を終えた、というフレーズがたやすく思い浮かびますが、その真意を諸君はどのように考えていますか。義務教育の「義務」とは、当然保護者のものであり、それが外れれば諸君は自立するしかないのです。とある教育学者が『『自立』は嫌いだ』と述べたのを聞きました。つまり、「自立」とは、寄る辺なき状態に放り出されるという含意があるということです。確かに、「自立」の意味するところには、他者に頼ってはいけないという観念が強く感じられるかもしれません。しかし、そういった意味でのこの言葉は、助け合うことが難しく、その社会的責任を放棄する際に使われるエクスキューズであるように思われてなりません。「自立」とは本来、世界の中でかけがえのない存在として立った者同士が、互いのかけがえのなさを認め合い、支え合うことを可能とすることであると、私は思います。中高6年間、諸君の「自立」に向けた、すなわち自分探しのための学びは続いていきます。ちょうどその折り返し地点に来ているわけですが、今述べた「自立」の実相は、これからの後半戦にじわりと見えてくるはずです。君らが、思い通りに、伸び伸びと学び続けることを、大いに期待しています。

以上をもって式辞といたします。

令和3(2021)年 3月24日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦